

# 物部川ミュージカルが小学生の行動変化・成長に影響を与えた動機付け要因

1190442 片岡 莉那

高知工科大学経済・マネジメント学群

## 1. 概要

筆者は、高知県東部を流れる物部川で起きている環境問題を、市民ミュージカルを通して地域の方々に知ってもらう活動を行っている。この活動には、小学生低学年から大学生、大人まで多くの方が参加している。

ある小学生（以下、T君と称する）は、周囲から、コミュニケーションが少し苦手な、「内気な子」と思われていた。しかし実際には、T君は、毎回ミュージカルに参加し、多くの観客の前にもかかわらず、堂々と台詞を言い、元気よく歌を歌うなど活躍している。筆者には、このようなコミュニケーションが少し苦手なT君が、何故人前に立つ活動に参加しようとしたのだろうか、という疑問がうまれた。さらに、お母様には、T君から「参加したい」と言われた時、どのような思いで参加させたのか、先生はどのような思いでT君を見守っていたのかなど、周囲の人々がT君をどのように支援してこられたのかについても調べたいと思った。

本研究では、まず、T君、母親、学校の先生にインタビュー調査を行い、その結果を分析し、本人が当初持っていた不安が自信に変化した過程を、自己決定の段階性（Ryan & Deci, 2000; Deci & Ryan, 2002; 桜井, 2009）に基づき考察する。次に、この結果を筆者自身の実体験と比較する。以上から、この物部川ミュージカル活動が小学生の行動に影響を与えた周囲からのフィードバックと、動機付け要因を明らかにすることを目的とする。

## 2. 背景

ある小学生の男の子（以下、T君と称する）は、人と話すことが苦手であり自らを主張できず、そのため周囲から内気な子だと思われていた。しかし、第一回目の物部川ミュージカル活動に参加したことが契機となって、学校生活の中で

自ら想いを主張できるようになるなど、彼の行動に変化が現れている。

物部川ミュージカルは、流域で起きている環境問題を一人でも多くの地域住民の方に知ってもらうために4年前から毎年企画・実施している市民ミュージカル活動である。今年（2019年）は、3月に5回目を上演する予定である。T君はこの活動に毎年参加している。筆者は、コミュニケーションが少し苦手なT君が、この活動に参加しようとした理由に興味を持った。筆者は、声が物理的に出ないので、自分の意思を人に上手く伝えることに苦労してきた。その面で、T君と筆者には共通点が存在する。

そこで、T君の物部川ミュージカルへの参加動機と筆者自身の体験談を比較することが出来れば、興味深い分析結果が得られるのではないかと考えた。

新しい活動を行う時、多くの場合、不安が伴う。それが自律へと変化する時、必ずといっていい程、周囲からのフィードバックが存在し、その人の内発的動機付けに大きな影響を及ぼすように思われる。今回の場合、T君の母親や学校の先生などの周囲からのフィードバックにより、T君自身の内発的動機付けが発生し、最終的には、自律的参加へと繋がっていくように思われるのである。

## 3. 目的

本研究は、ご本人、お母様、小学校の先生を対象にインタビュー調査を行い、この物部川ミュージカル活動で小学生の行動変化・成長に影響を与えた動機付け要因を、デシの内発的動機付け、交流分析、に基づき明らかにすることを目的とする。

## 4. 研究方法

本研究では、まず、自律性を高めるために行われる支援の一つとしてのフィードバック、交流分析、その構成要素の一つであるストローク、動機づけ理論の概要を整理する。

次に、インタビュー調査を行い、T君のミュージカル参加における自律性の変化を分析する。T君の大事な周囲である母親と小学校の先生にもインタビュー調査を行い、母親と先生の考え方・支援（フィードバック）が、本人をどのように動機づけたのかを考察する。フィードバックが動機づけに与えた要因を整理し、最終的に自律的参加が実現した要因を検討する。

## 5. 先行研究

### 5.1 フィードバック

フィードバックには、多くの定義が存在する。心理学では、フィードバックは一般的に、効果的な働きかけを行う正のフィードバックと、否定するなどの反対の働きかけとなる負のフィードバックに分類される。本研究では、分析の一つの柱として、フィードバックと次節で紹介する交流分析のストロークを位置づけた。

### 5.2 交流分析

交流分析（TA=Transactional Analysis）は、1950年代半ばに、アメリカ精神科医であったエリック・バーン博士によって、精神分析を土台とし、人の心と行動を快適にする心理学である。TA（交流分析）は、1つのパーソナリティ理論として、個人が成長し変化するための体系的な心理療法であり、コミュニケーション理論や生涯発達理論でもあり、潜在能力の顕在化・自己実現にもつながる。TA（交流分析）は、

- 1 ストローク（ふれあい）
- 2 自我状態（エゴグラム）
- 3 対話分析（コミュニケーション）
- 4 人生態度（人生の基本的立場）
- 5 心理ゲーム（トラブルパターン）
- 6 時間の構造化

### 7 人生脚本（人生のシナリオ）

の7つで構成されている。本研究は、交流分析の構成のうち“ストローク”を重視する。

ストロークは、相手の存在を認める言動のすべてを示す。（北森義明『チームビルディング』）

これらの肯定的なストロークの中で「人の話を聴く」ことが重要となる。これは、コミュニケーションの基本となる。北森も、著書『チームビルディング』の中で、コミュニケーションにおいて、「人の話を聴く」ことの重要性を強調している。大田も著書『学力とはなにか』の中で、学力を向上させるためには、「聴く」ことが重要であることを主張している。

### 5.3 動機付け

動機付けには、外発的動機付けと内発的動機付けの二つがある。外発的動機付けは、活動することよりも、報酬を重視する場合の動機付けを示す。内発的動機付けは活動すること自体を目的とし、それ以上に報酬を必要としない場合の動機付けである。

### 5.4 自己決定理論

自己決定理論は「欲求論的アプローチ」に属する理論である。そして、これは動機付け全般に関わる理論である（動機づけ理論と学生への応用（小池伸一））。自己決定理論には、認知的評価理論と有機的統合理論、因果志向性理論、基本的欲求理論の四つから構成されている。本研究は、四つの構成の内「有機的統合理論」を参考に研究を進める。

デシによると、認知的評価理論と自己決定理論の側面は、学校や家庭の環境が自律性と有能性を高めるために支援するための本質的な動機付けである。しかし、本質的な動機は活動のみ生じ、内在的な興味ならば、魅力、挑戦、または個人の価値があることを示す。そのような魅力を持たない活動には認知的評価理論は適用できないと述べられている。

### 5.5 有機的統合理論

有機的統合理論は、自由に自発的に行動することを意味する自律性を重視している。外発的な先行要因を内発的な先行

要因にしていく価値や規範を自分のものにするという内在化に注目し、外発的動機付けが自律性の程度を四つに区分している。自己決定段階性（Ryan & Deci, 2000Deci & Ryan, 2002；桜井, 2009 から）は、動機付けとして、動機付けがない無動機付けから、外発的動機付け、内発動機付けへと（他律から自律へと）行動の自律性の程度を示したものである。

## 5.6 総合表現活動によって与える影響

内山は、磐田ミュージカル卒団生を対象にアンケート調査を行った。その結果、磐田ミュージカルでの思い出・印象については、公演・本番が14件と一番多く、次に仲間・協力が9件である。そして、磐田ミュージカルで身についたと感じることについては、礼儀は12件、コミュニケーションが11件、表現力が6件、自信が5件という結果になっている。

## 6. インタビュー調査

本研究は、T君、母親、小学背の担任当教員を対象にインタビュー調査を行った。

日時：2019年1月15日（火）16:00～17:30

場所：小学校

対象者：T君（小学校6年生）

T君の母親

Y先生（小学校の担任教師）

聞き手：筆者（片岡）

協力者：W教授（渡邊教授）

### <インタビュー調査結果：小学校6年生T君>

筆者：物部川ミュージカルになぜ参加しようと思ったのですか。

T君：人と話すことが苦手だった。

筆者：1回目のミュージカルで学校以外の人と交流する時不安だったのですか。

T君：初めての人の声をかけるのが不安だった。

筆者：この活動で苦労した時、どのように乗り越えましたか。

T君：人前で声を出すのが苦手だったけど、みんなと練習して声を出せるようになった。

筆者：3回目・4回目の参加するにあたってどんな気持ちで練習しに来ていましたか。

T君：みんなと練習ができるから楽しみにしていた。

筆者：参加してきて自信がついてきましたか。

T君：クラスでも自分の意見が言えるようになったので自信がついた。

筆者：一番助けてもらったと思う人はいますか。

T君：高知工科大生。

W教授：歌とか好きだったのか。音楽とか。

T君：当時はあまり好きではなかったが、やっていってどんどん楽しくなってきた、歌が好きになった。

W教授：いつ頃から自信がついてきたの。

T君：2年生の（第一回目の）ミュージカル活動が終わってから。

W教授：“来年も出よう”と思ったの。

T君：そういうことが楽しいから。

W教授：音楽の時間とかミュージカル前と比べて、今の音楽の時間が楽しいとか思ったりもする。

T君：する。

筆者：今後のミュージカルでしてほしいことはありますか。

T君：出演を増やしてほしい。

### <インタビュー調査結果：ご本人のお母様>

筆者：彼（本人）が参加する時、不安はあったと思いますが、参加させた理由はなんですか。

母親：今まで、表に立つてことに全くしてこなかった子なので、はじめて2年生の時に“出たい”っていった時は、本人の“出たい”というのを重視しようかなと思って。

筆者：彼が不安や困っているとき、どのような手助けをしていますか。

母親：困っちゃうかなと思う時は、大音声小さくなったり、そういうのがあるのでそうなのかなって。

筆者：今後、彼にどのように育って行ってほしいですか。

母親：いろんな好きなことを活かして、のびのびとじゃないですけど、そういうことを頑張ってもらったらいいですね。

W教授：どんなふうにお子様の成長とかを考えていらっしゃるのでしょうか。

母親：いや、そんなに人並みの事ですけど、自分たちもやりたいこととかは、やらせたいなっていうのだけ。

W教授：どんなふうに思われたのですか。

母親：自分がそんな感じで今まで育ってきているので、やりたいことを尊重しちゃったり、間違っちゃうでいって…。

W教授：ミュージカルに出て、こんなところ変わったかなって思われるところはありますか。

母親：自分がどう思っているのかを考えてみるようにはなつたかなと思いますね。

W教授：毎回リハーサルに来ていただいて、どんなお気持ちで来てくださっているんですかね。

母親：コミュニケーションが苦手な性格なので、上手く入っていけるのかみたいな感じですね。心配の方が大きいですね。

### <インタビュー調査結果：担当教員 Y 先生>

筆者：初めて会った時の彼と今の彼に対する印象は変わりましたか。

Y先生：私本当に“しゃべるのかな”って思ってたところがあって、だから、6年生で担任を持ってみてちゃんと想いもあるし、ちょっと言葉に出すときに、苦手な部分もあるけど、結構頑なに自分の想いを持っているところもあるので、私の今まで見てきたイメージとは違うかなって思いました。

筆者：実際ミュージカルを活動している彼を見て、どんな気持ちになりましたか。

Y先生：私、ミュージカルを2・3回観に行ったことがあるんですけど、毎回本当に、中々自分で想いを伝えにくいだろうに、こんなに楽しくやるんだなっていうのが意外だった

し、なんかうれしかったですね。そんなので、少しずつ彼はこんな子なんだなってイメージが毎年変わっていったかな。

筆者：学校生活での彼は、ミュージカルしている彼と違いますか。

Y先生：半々くらいでしょうか。学校でも、今やっていることが自分の得意なこととか興味のあることとかっていう時の姿は、やっぱり共通しているし、やっぱり苦手なこととか中々練習できずに本番迎えちゃう場面もいっぱいあるから、そういう時には不安なって、そういう場面もあるので。

筆者：ふだん、彼や他の生徒さんが困っているとき何を軸にして支援を行っていますか。

Y先生：あの子はこういうことをしたら上手くできる子かなって、何に困っているのかなっていうのを考えて、支援はしています。

W教授：“ミュージカルとそこは同じだよ”みたいなことがあれば。

Y先生：最初の頃、6年生で担任を持ったとき、どうしても受け身になる場面があったので、中々発言できない。困っても、もう“ちーン”っていう感じだったりとか、のりとか忘れて来ても“のり忘れてきました”とかも中々言えなくてっていう感じだったんですけど、最近は困ったら“これこれ忘れてきました”とか“これこれしてもいいですか”とか、結構自分から言える場面は増えてきたかなって思います。

(インタビューの一部より)

## 7. 結果

T君は、参加前は人と話すことが苦手で不安を抱えていた。参加後は、リハーサル、本番、本番後に、高知工科大生から声を掛けられたことにより、徐々に不安が和らいでいった。お母様へのインタビュー調査結果から、参加する意思を更に強くしたのは、T君の想いを尊重した母親の存在があった。そして、一回目のミュージカルが終わった後、「また出たい」という想いが湧き上がり、自信がついた。その自信は母親やY先生も感じている。家庭では、自分がどう思ってい

るのかを考えてみるようになっていく。学校では、初めはどうしても受け身の場面が多くあり、自ら発言できないこともあった。しかし最近では、困った時は、自分から困ったといえる場面が増えてきている。T君の行動に変化生じていることが見受けられる。

Y先生からは印象の変化も伺うことができた。6年生の担任を受け持つ前は、「静かな子」との印象を持っていた。担任を持って直接彼と関わる時間が増えたことで、「頑なな想いをたくさん持っている子」という印象へと変化していた。クラス内には多くの子供がいて、一人一人の成長を見守るのは大変であるが、生徒さんへの支援についてのお考えから、T君についてもとても気を配っておられることが伺えた。

第三、四回目のミュージカルでは、T君は、みんなと練習することが楽しいので、練習に来ていたことが分かった。さらに、ミュージカルに参加する前は好きではなかった音楽に、今は興味を持ち、音楽の授業が楽しみになっていると言った変化も見られた。

T君の行動の変化は、ミュージカルのリハーサルでも観察された。第五回物部川ミュージカルのリハーサルは、2019年2月16日から始まった。それは、2月17日の二回目のリハーサルで、台本の通しを行った時のことである。舞台裏で出演待機していた低学年の小学生の子が台本で分からないことを聞いた時、それに対してきちんと丁寧に受け答えをするT君の姿があった。さらに、やんちゃな小学生がいたずらをした際、冷静に注意する上級生らしい一面を伺うことも出来た。ミュージカルへの参加が、T君の行動に影響を与えていることを、筆者自身が改めて実感できた瞬間であった。

以上の調査結果からT君の行動の変化を見ることができた。

## 8. 考察

### 8.1 成長過程の分析

ミュージカルへの参加を通して、T君の成長を観察することができた。本章では、インタビュー調査結果から、心理学

者エドワード・L・デシが提唱した自己決定の段階性を基に、T君の成長過程を分析することを試みる(図1)。

初めに筆者が、インタビュー調査で「参加した理由」について質問した時、T君は、「人と話すことが苦手だったから」と答えた。調査後、筆者には、その答えに対して、「何故、自分の苦手なことをしようとしたのか」と新たな疑問がうまれた。その疑問への回答として、第一に、T君は自分自身の苦手なことを克服したかったかという点が挙げられる。第二に、インタビューの中で、「そういうこと(ミュージカル活動をする)が楽しいから」という感想から、「仲間との協働活動してみたい」との強い思いが存在していたからと考えられた。

自己決定理論・有機的統合理論では、各動機付けを、自律性の程度に応じて、外発的調整、取り入れ的調整、同一化的調整、総合的調整、内発的調整に分類している(図1)。T君の場合、参加前に自己の弱点を理解し、将来的にその克服が必要であると認識していた。これは、自己決定の段階性の「外発的動機付けの同一化的調整」に該当する。ミュージカルのリハーサル・本番を経験する中で、少しずつ楽しさを感じ始め、第一回目のミュージカル終了後は「来年も出よう」と思うようになっていった。これは、「統合的調整」に該当すると考えられる。さらに、表現活動をする中で、舞台に立ち発言する楽しさや、音楽への興味を感じ始めるようになった。これらの感覚は、「内発的調整」であると考えられる。

このようなコミュニケーションに対する苦手意識の克服は自分に必要と思いはじめた「同一化的調整」から始まっていることが推察できる。

行動	他律的 ←		→ 自律的			
動機づけ	無動機づけ	外発的動機づけ				内発的動機づけ
自己調整 (内在化)	なし	外的調整	取り入りの調整	同一化的調整	統合的調整	内発的調整
自己調整に関する事項	・非意図的 ・有能感の欠如 ・統制感の欠如	・従順 ・外的な報酬 ・罰	・自我関与	・個人的な重要性 ・感じられた価値	・気づき ・自己との統合	・興味・関心 ・楽しさ
感じられた因果の位置	非自的	外的	外的寄り	内的寄り	内的	内的
学習行動の理由例	やりたいとは思わない	「人から言われるから仕方なく」 「やらないと叱られるから」	「やらなければならぬから」 「不安だから」 「恥をかきたくないから」	「自分にとって重要だから」 「将来のために必要だから」	「やりたいと思うから」 「学ぶことが自分の価値観と一致しているから」	「面白いから」 「楽しいから」 「興味があるから」 「好きだから」

図1 自己決定の段階性

(Ryan & Deci, 2000; Deci & Ryan, 2002 ; 桜井, 2009 )

## 8.2 内発的動機付けの三要素

モチベーションを左右する動機付けに関して、エドワード・L・デシは「人が自律的に生きているかどうかのカギとなるのは、自分自身の選択で行動していると感じられるかどうかである」と提唱した。

デシは、小学校から上がると急激に好奇心が下がることに疑問を抱いた。その原因は、スキナーらにとると選択の自由がモチベーションを高めことが分かった。

本研究は、内発的動機付けを上げる三つの欲求に基づいて検討する。

- ・自律性 (self-determination)
- ・有能感 (competence)
- ・関係性 (relatedness)

自律性は、自分の意思で自由に選択することである。

有能感とは、“自分はできる”という自信からステップアップしようとする感覚である。

関係性は、誰かと結びついていたという人間の傾向である。なお、関係性だけを強めても、モチベーション向上にはならない。自律性や有能性と共に強める必要がある。モチベーション向上には、自分の意思で行動に移し、仲間との協働で成り立つことがスキナーらの提唱から分かった。つまり、

統制的な行動より統合的な行動が内発的動機付けを向上させる。

本研究では、物部川ミュージカルの活動が、どのようにして統合的な行動を促しているのかを明らかにするために、どのような支援が自律性を高めたのか、その結果として、どのように同一化的調整、統合的調整、内発的調整が生まれたのかを分析する。

自己決定理論・有機的統合理論では、自律性の程度に焦点が当てられている。ただし、聞き取り調査の結果から、上記三つの欲求である自律性、有能感、関係性は相互に影響を及ぼしているように思われた。そこで、次節では、まず、有能感と関係性の変化を調査する。

## 8.3 不安と有能感・関係性に関する考察

T君へのインタビューで「何故、参加しようと思ったのですか」という質問に対して、「人と話すことが苦手だったから」という受け答えがあった。この言葉の背景には、「苦手意識を克服したい」という目的意思があったと推測できる。最初は、目的を克服しようとする中で、「初めての人に声を掛けるのが不安だった」との意識があった。この不安は、工科大生の支援によって、自己の有能感に気づき、克服していった。T君は、「台詞が覚えられるかどうか」、「大きな声で歌うことが出来るのか」という不安も感じていた。これらの不安に関しては、仲間と一緒に練習するうちに、自然と自らの有能感に気づいていったと考えられる。

ここで筆者の経験を述べる。筆者の場合、参加する前に「人の役に立ちたい」という想いがあった。教授に相談したところ、ミュージカルを紹介され、好奇心が芽生えたことがきっかけとなる。最初の出演でダンスを披露した後、二回目は小学生にダンスを教えることになったが、ここで不安がうまれた。筆者もT君と似ていて、コミュニケーションに不安があるため、「どのように指導すれば伝わるのか」と緊張と不安でいっぱいだった。実際には、小学生への指導は、言葉だけでなく、手振り身振りで出来ることに気づく機会となった。教授が背中を押すかのように指導の場を設けてくれたこ

とが、自分の不安を克服出来た一因であると考えられる。勿論、指導する中で、先生方や後輩の皆さんからも数多くの支援があった。それらの支援も、筆者の不安の克服に繋がっていった。

T君と筆者の不安の克服過程から、周囲の支援がないと克服できない場面もあれば、仲間と協働する中で自らの力で克服する場面もあると考えられた。

以上から、不安を克服する過程には、他者からの支援によって自己の有能感に気付く場合と、自らが自己の有能感に気付く二つの場合があると考えられた(図2)。後者は、協働環境の成立という関係性の変化が、有能感向上の一因になっていることを示唆していると考えられた。



図2 不安から有能感への変化

#### 8.4 自己決定の段階性と内発的動機付け

前節で述べたように、ミュージカルに参加することによって、T君は「同一化的調整」、「統合的調整」、「内発的調整」の三つの段階を経験していったように考えられた。表1にその要因を整理した。ここで自律性の程度に加えて、有能感と関係性の変化についても考察を加えることを試みた。

表1 内発的動機付けの影響要因

		同一化的調整	統合的調整	内発的調整
自律性	母親	彼の意思を尊重	毎回のリハーサルと本番に来る	
	工科大生	--	一緒に練習する	
	先生	--	気を配る	
有能感	母親	--	・漢字に振り仮名をふる ・歌を聴かせる	
	工科大生	--	声掛け	協働
	先生	手助け		
関係性	母親	人と話すことが苦手な子		多少成長した
	工科大生	他人	小学生	仲間
	先生	静かな生徒		頑なな想いを 持つ生徒

まず、物部川ミュージカルの運営方法の特徴について述べておく必要がある。物部川ミュージカルに参加している人たちの中には、ミュージカルそのものに好奇心・興味・関心を持っている者もいれば、T君のように何かを克服したいという目的を持っている者もいる。すなわち、参加者は強制されることなく、自分の自由意思によって参加している。参加後は、各自が演じたい役を可能な範囲で自由に選択している。このように、物部川ミュージカルには、各参加者が複数の場面で自由な選択の機会が与えられている。デシは、内発的動機付けとして自由な選択を与えることが重要であることを指摘している。物部川ミュージカルには、内発的動機付けを生み出す基盤が存在していると考えられる。

次に表1の内容について述べる。

第一に、自律性向上支援に関しては、母親が最も大きな影響を与えたと考えられる。母親の「T君の参加意思を尊重した」ことが、T君の同一化的調整の基盤になっていたと考えられる。さらに、母親は、リハーサルと本番にT君を送迎す

るだけでなく、全てのリハーサルに出席して、練習の様子を見守っていた。工科大生と一緒に練習を行い、先生は学校面で気を配っていることを伺うことが出来た。これら三者の支援が、T君の自律性を高め、動機づけを統合的調整、内発的調整に変化させていった一因と考えられた。

第二に、有能感向上支援に関しても、母親は大きな役割を果たしていたと考えられる。漢字で書かれている脚本に振り仮名を振り、上演する曲をインターネットを通して聴かせる等の支援を行っていた。工科大生は自らT君に声を掛けに行き、先生は常に「生徒が何に困っているのかな」を考えて手助けをするといった支援があった。また、工科大生がT君と協働することも、さらなる有能感向上に寄与していると考えられる。これら三者の支援が、T君の有能感を高め、動機づけを統合的調整、内発的調整に変化させていった一因と考えられた。

これらの分析は、以下のように要約できる。自己決定理論・有機的統合理論では、人は「同一化的調整→統合的調整→内発的調整」と常に「向上」とは想定されていない。しかし、T君の場合は、T君は、第一回目のミュージカル終了後、「また出たい」という自律的な意思表示があり、第二回目以降は自分自身の選択によって行動・参加している。ミュージカルへの参加を通して、調整段階が「向上」しているように思われた。

物部川ミュージカルでは、「参加するかどうか」、「何の役になりたいか」などについて、自由選択の機会が設けられている。その中で、母親からの「参加意思の尊重」という支援が、内発的動機付けの基盤要因になっていると考えられた。第一回目のリハーサルにおける工科大生の支援、先生による常に生徒の立場に立った支援が、有能感を高め、統合的調整・内発的調整へと「発展」させている一因になっていると思われた。

さらに、仲間としての協働、仲間意識の芽生えという関係性の変化が、重要な役割を果たした。この関係性の変化は、自律性・有効性の向上の結果として生まれた。同時に、リハ

ーサルを重ねることによって「ミュージカル成功」という目的の仲間として共有した結果、声掛け・支援がさらに高まり、T君の有能感が高まった側面もある。すなわち、関係性は、内発的動機付け向上の結果でもあり原因でもあるように思われた。

これらの支援と協働より、T君の行動は統合的な行動となり、内発的動機付けを向上させたと言える。

### 8.5 フィードバックとしての交流分析におけるストローク

前節までは、T君の内発的動機付けの変化を、自己決定理論から考察した。本節では、交流分析、特にストロークの視点から、フィードバックの効果について検討する(図3)。

T君にとってミュージカル参加への動機付けは、母親の「本人の参加意欲の尊重と受け入れ」によって強化された(フィードバック1)。参加中は、人と話すことへの不安は、工科大生の声掛けの支援、かつ、「ストローク」、すなわち、相手を受け入れる姿勢によって、徐々に軽減されていた。また、台詞を覚えることへの不安や、上手く歌うことへの不安は、仲間としての協働意識によって、自己の有能感への気づきが生まれ、解消されていった(フィードバック2)。Y先生に関しては、T君をいつも気にかけていることが、「T君や他の生徒を支援する時、『何に困っているのか』を軸にして支援している」との回答から分かる(フィードバック3)。

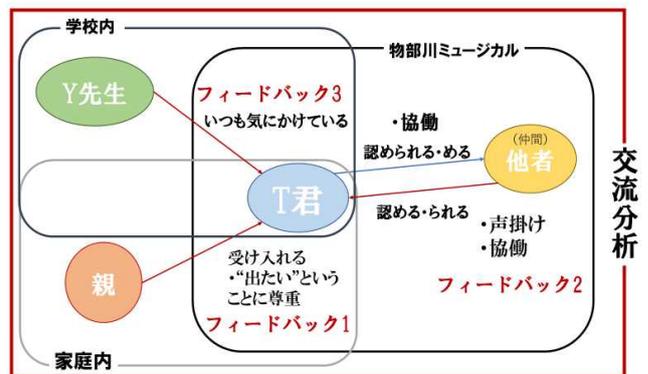


図3 交流分析とフィードバックの構図

母親、仲間、Y先生のこれらの行動は、ストローク、すなわち、T君の存在を認める言動と解釈することが出来る。このことが、内発的動機付けに繋がっていったと考えられる。ストロークは集団活動の協働する中で最も重要な要素となっていたと考えられる。

ストロークによって、人に認めてもらうことは、まず、本人に安心感を与える。更に、本人自ら、「人の役に立ちたい」といった感情が芽生え、最終的には、統合的調整と内発的調整に繋がっていく。交流分析におけるストロークは、関係性だけでなく、有能性、並びに自律性を向上させるための基盤になると考えられる。

### 8.6 筆者とT君の共通点

これまで、T君に関して分析を進めてきた。筆者自身は、声が物理的に出ないので、自分の意思を人に上手く伝えることに苦労してきた。その面で、T君と筆者には共通点が存在する。そこで本節では、両者の経験を性格、親の考え方、環境、の三つの視点から比較してみる(表2)。

表2 筆者とT君の支援に関する比較

	筆者	T君
性格	(外見) 明るい子	(外見) 静かな子
	(内面) 好奇心旺盛	(内面) 頑なな想いを持っている子
親の考え方	やりたいことをなるべくさせたい	想いを尊重する
学校環境	学校：毎年全校生徒に事情説明を行う。	学校：全72名(1クラス12名程) 生徒一人ひとり気を配ることができる

性格は、周囲からの印象を外見と内面に分類する。筆者は、外見は明るい子であるが、直接関わった後は「好奇心が旺盛な内面を持っている子」と見られることが多い。T君の場合は、周囲の人は始め「静かな子」だと感じていたが、関

わっていくことで「頑なな想いを持っている子」印象が変化していった。

次に親の考え方は、筆者の親は「やりたいことをなるべくさせたい」という考えがあった。T君の親は「彼の想いを尊重する」といった考えがあり、共に本人のやりたいことを重視していることが分かる。ここで、親の考え方は親の家庭環境によって大きな影響を受けていると考えられた。今回のインタビュー調査を行った際、W教授の「どんな風に思われたのですか」の質問に、T君の母親は「自分がそんな感じで(やりたいようにやってきたので)今まで育ってきているので、やりたいことを尊重しちやったり…」とおっしゃった。筆者の母親からも、家庭でやりたいようにしてきたという話を聞いたことがあった。お互いの言葉から、親の家庭環境が子育てに影響を与えるのではないかと感じた。

学校環境面では、筆者が学んだ伊野小学校は、毎年全校生徒の前で「筆者の生涯について」お話しする時間を設けてくれた。このおかげで、クラスメイトや他のクラスの人は障害についてある程度理解してくれていたため、恵まれた環境で育ってきた。先生方には、筆者から目を離さないように様々な場面で気を配って頂いていた。

T君の場合、片地小学校という全72名の小規模な学校であり、1クラス約12名ほどの生徒がいる。少人数のクラス編成なので、先生方も他校のように数十名いるクラスよりは、一人ひとり生徒を見ることが出来る環境にある。

この比較分析は、デシの環境が内発的動機付けに影響を与えるという主張を、改めて感じさせられる結果となった。

### 9. 提案

第7章と第8章の分析結果より、コミュニケーションが苦手なT君や声に難がある筆者のような生徒に対して提案を行う。

#### 【“できる”という有能感を与える動機付け要因】

- ・存在を認める(ストローク)
- ・周囲から行動する(例：声掛け)

・常に「聴く」姿勢を継続する

この三つが有能感を高めると共に自律性が高まるのがこれまでの考察から言える。

### 【情報の共有】

生徒の環境が変わるとき、その直前に「その子がどうい子なのか」に関する情報を他の環境の方に提供・共有する。そうすることによって、仮に当該生徒が困っている場合でも、職員は対応しやすくなると考えられる。

## 10. 結論

この研究では、T君の内発的動機付け水準とその要因、並びに、それに伴う行動変化について動機付け理論、自己決定理論、交流分析、ストロークの視点から検討した。

T君の場合、過去4回のミュージカルへの参加を通して、自律的な参加の度合いが、自己決定理論・有機的統合理論における同一化的調整→統合的調整→内発的調整、と変化していったこと、すなわち、内発的動機付けが高まっているように考えられた。「人と話すことが苦手だったから」という苦手意識を克服する理由で参加し（同一化的調整）、参加後は、「みんなと練習が出来て楽しい」、「歌とか音楽がどんどん楽しくなっていった」と感じ、第一回ミュージカル終了時には達成感と自信獲得によって「来年もまた出たい」と思い（統合的調整）、最近では「音楽の時間が楽しい」「ミュージカルの出演を増やして欲しい」と思うように変化している（内発的調整）。第二回目のミュージカルからは、T君の行動に変化が見られるようになっていき、学年が上がるごとに活動練習において、後輩たちに教える様子や自らの想いを発言する等の様子の変化があった。

T君の内発的動機付けの主な要因は、母親・先生・高知工科大生の三者による支援、並びに、工科大生などとの協働の中で自らが気づいた有能感であると考えられた。その中で、母親による自律性と有能感の向上支援は、極めて大きな影響を与えていると考えられた。「T君の参加意思を尊重した」ことは、T君の同一化的調整の基盤になっていたと考えられ

た。リハーサルと本番への送迎、全てのリハーサルへの出席と様子を見守り等の自律性支援、漢字で書かれている脚本に振り仮名を振り、上演する曲をインターネットを通して聴かせる等の有能感支援は、母親ならではの「献身的な」支援であると思われた。

先生の愛情深いまなざしは、T君の自律性と有能感の向上に重要な役割を果たしていると考えられた。常に、生徒が自ら意見を述べてくれるまで辛抱強く待ち、「生徒が何に困っているのかな」を考えて手助けすることは、忙しい学校現場で実施することは容易ではない貴重な支援であると感じた。

工科大生もまた学生らしい「さわやかな」役割を果たしていたと考えられる。気さくに声を掛けることによって、学外の人と話すことに関する不安が一気に低下し、リハーサルを重ねる中で仲間意識を共有することによって、T君の有能感・自律性はさらに高まっていったと考えられた。

内発的な動機付けを高めるためには、本人の有能感を高めるような支援をすることが重要である。また、自らの力で有能感を高めることが出来る場合も存在する。そのためには、協働できるような活動の場が必要であることが、考察した結果分かった。工科大生との協働は、後者の一例であると思われた。有能感を高めるような内発的な動機付けが、自律性をも高めるという関連性が存在すると考えられた。

母親・先生・高知工科大生の三者による支援は、「フィードバック」という言葉で置き換えることも出来る。その根幹として、相手の存在を認める「ストローク」の実践が、内発的動機付けを高める上で決定的に重要な役割を果たしていると考えられた。

筆者とT君を比較した結果、親の存在とともに、学校環境も内発的な動機付けに影響を与えていることが、改めて確認できた。今回の調査を通して、T君や筆者の家庭のように、子供の自由意思を尊重する教育方針を改めて貴重であると感じた。

提案としては、T君や筆者のような「コミュニケーションを苦手としている」生徒には、“できる”という有能感を与

える動機付け要因を実施すること、並びに、特に生徒の環境が変わるときに、情報を共有することが必要であると考えられた。本稿で調査対象とした小学校では、生徒数が少ないため、学校教員には心の余裕があったように思われる。仮にこのような学校ではなく、1クラス数十人のようなより規模の大きい学校となれば、教員が一人ひとりの生徒を細かく見ることは必ずしも容易ではない。数十人のクラスである学校でも、各生徒を内発的に動機づけ出来るような方法を見出していく必要があると考えられる。

本研究は一つの事例として検討したが、今回の調査だけでは、ミュージカルの効果を定量的特定できるところまでは至らなかった。それについては、今後の課題としたい。

今後もT君の成長が楽しみであり、この物部川ミュージカルで得たものを活かし続けていくことを心から願う。

## 11. 謝辞

本研究の遂行と論文作成にあたり、ご指導・ご助言を頂きました高知工科大学経済・マネジメント学群渡邊法美教授に心より感謝し厚く御礼申し上げます。また、貴重なお時間をとってインタビュー調査にご協力していただきました、T君ご本人様、お母様、小学校の職員の皆様感謝し、御礼申し上げます。

## 13. 参考文献

### 【インターネット】

文部科学省 「言語活動の充実に関する研究」

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2016/06/20/1372311.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/06/20/1372311.pdf)

文部科学省 「確かな学力の育成にかかわる実践的調査研究」

における学力定着に加田を抱える学校の重点的・包括的支援に関する遊佐研究：高知県中学校

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/02/1351444\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/10/02/1351444_3.pdf)

交流分析協会

<https://www.j-taa.org/ta.html>

知財マンの心理学4 ストローク (パテントメディア 101号)

| 特許業務法人 オンダ国際特許事務所

[https://www.ondatechno.com/Japanese/patentmedia/2014/101\\_1.html](https://www.ondatechno.com/Japanese/patentmedia/2014/101_1.html)

心の影響「ストローク」とは？ーモチベーションアップ法則

<https://www.motivation-up.com/motivation/stroke.html>

総合表現活動の育むものー磐田こどもミュージカル卒団生の調査よりー

[file:///C:/Users/Krina/Downloads/ryujo\\_38\(153-163\)%20\(2\).pdf](file:///C:/Users/Krina/Downloads/ryujo_38(153-163)%20(2).pdf)

動機づけ理論と学生指導への応用

[https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-](https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/H0/0006/H000060L065.pdf)

[contents/H0/0006/H000060L065.pdf](https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/H0/0006/H000060L065.pdf)

プロセスフィードバックが動機づけに与える影響

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep/65/3/65\\_321/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep/65/3/65_321/_pdf)

日本におけるフィードバック概念受容の検討

<https://www2.sed.tohoku.ac.jp/library/nenpo/contents/63-2/63-2-17.pdf>

モチベーションを上げる3つの欲求、心理学者デシが明らかにした報酬と意欲

<http://millkeyweb.com/motivation-deci/>

Intrinsic and Extrinsic Motivations: Classic Definitions

and New Directions (内在的及び外発的動機付けー古典的定義と新しい方向ー) エドワード・L・デシ

<https://mmrg.pbworks.com/f/Ryan,+Deci+00.pdf#search=%27Edward+deci%27>

### 【書籍】

大田堯著(1969)『学力とはなにか』国士社

北森義明(2008)『チームビルディング』東洋経済新聞社

貴戸理恵 (2015)『「コミュ障」の社会学』青土社

エドワード・L・デシ、リチャードフラスト、桜井茂男  
(1999)『人を伸ばす力-内発と自律のすすめ-』新曜社